

日常生活史 — G氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」(その七)

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91・97・98・99・101・103輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

利用した当該資料は、1980年4月21日および5月9日に、G氏のブラウンシュヴァイクの自宅での計6時間にわたるインタビューをA4タイプ用紙84ページに書き起こしたものである。

ここで、参考のため、まず、G氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

- 1905年4月22日 ブラウンシュヴァイクで誕生
- 1925年～1930年 ビュッシング社で機械工
- 1923年～1925年, 1930年～1932年 失業
- 1922年 国民スポーツ協会会員
- 1922年～1933年 ブラウンシュヴァイク・スポーツ協会会員
- 1923年～1933年 ドイツ金属労働者連盟
- 1922年～1933年 ブラウンシュヴァイク・スポーツ協会チーム・キャプテン
- 1934年 歯科医の補助看護婦と結婚

父：1857年にヴェンデブルクで誕生、1934年にブラウンシュヴァイクで死亡。職業は家具職人で、第一次世界大戦まではアンメ・ギーゼッケ&コー

ネゲン社、1918年～1930年までは体操器具製作工場に勤務した。SPD 党员および木工労働者連盟員

母：1857年にエッシャースハウゼンで誕生、1944年にブラウンシュヴァイクで死亡。職業は、料理人。結婚後は、近所の家庭の臨時雇いの家事手伝い。

未組織。出産は9回。

1. 両親について

私が生まれた時、父はもう48才でした。母は42才か43才でした。

私の父は、1857年6月12日ヴェンデブルク *Wendeburg* 村で生まれています。若い頃にブラウンシュヴァイク *Braunschweig* へ越してきたのですが、くわしくは知りません。いずれにせよ、若い独身の頃でした。

彼は、まだ教会にとどまっていました。新教でした。

職業は、木工職人でした。ヴェンデブルクで、すでに働いていたのかどうかは、わかりません。私が知っているのは、そこに彼の両親の家があったということだけです。彼は、職業を変えることなく、一生、木工職人でした。私が知っているのは、彼が、最初はAGK社、つまり、今のMIAG社で働いていたということだけです。

そして、第1次世界大戦中には、ここブラウンシュヴァイクの食糧局 *Proviantamt* でも働きました。この食糧局は、ハンブルガー通り *Hamburger Straße* の先にある、今のライアー通り *Reiherstraße* の工場の敷地内にありました。ここで木工職人として働き、第1次世界大戦直後に、体操器械の工場のフォン・ドルフス&ヘルレ社 *von Dolfs & Helle* に移ったのです。その後、ずっと長い間、最後まで同じ工場で働いたわけです。彼は、70才になっても、まだ、会社名は変わりましたが、この体操器械製造工場のシュネレ社 *Schnelle* で働いていたのですよ。この工場は、今もヒルデスハイマー通り *Hildesheimer Straße* にあります。

父は、私たちが、まったく尊厳をおかされた扱いを受けている、とつねづね言っていました。とくに父の賃金は、最低でした。いつも、まったく本当につましく暮らさなければならなかったのです。

父は、1934年に亡くなりましたが、71才か72才までずっと働いていました。彼は、母との間に9人も子供がいましたから、失業で中断することもなく、働きづめでした。

両親がいつ結婚したのかは知りませんが、いずれにしても教会ではなく、戸籍役場で結婚しています。

私の父が選挙権をもっていたということ、つまりブラウンシュヴァイク市の市民権を獲得したのだということは覚えています。私たちの家の居間には、「木工職人 ハイน์リッヒ・G *Heinrich G.*が、ブラウンシュヴァイク市の市民であることをここに……」と記された証書の額が、ずっと掛かっています。当時は、つまり1914年以前は、市民証書をもっていない人には、選挙権がなかったのです。選挙権を得るために、父は、当時にしては大変な額の金を、苦勞して工面したのです。それは生半可な努力ではありませんでした。

父は、SPD (社会民主党) の党員で、木工労働者連盟に加盟していました。

彼は、熱心なシュレーバーガルテン (郊外の小区画菜園) 愛好家でしたが、当時は、とくにそのためのクラブなどはありませんでした。彼は、エルンスト・アンメ通り *Ernst-Amme-Straße* に続いている、今のザールブリュクナー通り *Saarbrückner Straße* にわずかばかりの土地を借りて、早朝、庭仕事をしていたものです。

父は、1934年に亡くなっていますが、尿道に何か疾患があったのに、病院に行きたがらず、早くに亡くなってしまったのです。彼は病院が恐かったのです。

私の母は、1863年1月29日に誕生しました。彼女は、ハルツ地方 *Harzgebiet* の出身です。正確には、ガンダースハイム *Gandersheim* の辺りの、エッシャースハウゼン *Eschershausen* とかいう村の出身でした。

彼女は、ブラウンシュヴァイクで料理女をしていました。つまり、当時、ツィーゲン市場 *Ziegenmarkt* にヴィッテ兄弟店 *Gebr. Witte* という大きな肉屋の店があって、ソーセージ工場もあったのですが、そこで料理人をしていたので。ツィーゲン市場といっても、これは市場ではなくて、コーレン市場 *Kohlenmarkt* からバンク広場 *Bankplatz* へ抜ける通りの名前です。彼女は、結婚後すぐに私の長姉が生まれたので、そこでは働けませんでした。だから、家事の合間に、上流の人の家で、外へのお使いなどの仕事をしていました。若い所帯をうまく切り盛りするのに、彼女はいつも何かしら仕事をしていたので。

それは、定職ではなくて、どこかの家で家事の助けが必要な時に出かけていってするというような、臨時の仕事でした。だから、あちこちの家が仕事先でした。当時、私の両親は、ゾフィーエン通り *Sophienstraße* に住んでいましたが、この一帯は上流家庭の人びとが住む地域だったので、近所の家々から声をかけられたと聞いています。つまり、「あの家の奥さんが手伝いに来てくれるわよ」などと口から口へと伝わって行って仕事が舞い込んだようです。

私の母も父も初婚です。母が流産や死産を経験しているかどうかは、私はは知りませ。母は、84才で亡くなりましたが、下腹部の苦しみを訴えたことはありませんでした。彼女は、9人の子供を、みな普通に安産で出産し、どの子も、みな健康で元気に大きくなりました。

母は、SPDの党员でもなかったし、労働組合に組織されてもいませんでした。しかし、彼女は、ウィルヘルム・ブラッケ *Wilhelm Bracke* の熱心な賛美者で、いつも彼のことを話していました。彼は、1880年に亡くなっていますが、母は、彼のことを知っていたのです。例えば、彼女は、彼の葬式に赤いブラウスを着て参列したら、年上の人々が、「ああ、ここにも彼の賛美者が」と言ったのだそうです。

母は、第二次世界大戦中、1944年に亡くなりました。幸いなことに、彼女は空襲を体験しませんでした。1944年の10月には、彼女はもういなかったのですから、そうです、44年の夏に彼女は亡くなったのですよ。死亡の原因は、

老衰でした。ともかく、食べる物がなかったのです。母が必要とした栄養がとれず、少しばかりのミルクなどしか、もうなかったのですよ。1944年は、非常時でしたから、十分な食糧はなかったのです。しかも、その後は、食糧はもっと乏しくなっていました。

私の家族は、大家族だったので、親戚との付き合いや、両親がそろって酒場へ行くといったような、社会的な付き合いはしませんでした。

2. 兄姉たちについて

私には4人の兄と4人の姉がいます。兄姉の誕生日は、私のすぐ上の兄のアルフレット *Alfred* の誕生日しか覚えていません。彼は1901年5月27日に生まれました。3番目の兄のワルター *Walter* は、1898年7月生まれです。他の兄姉の誕生日はわかりません。私は、末っ子です。私が生まれたとき、一番上の姉は、24才か25才でした。ほとんどの子供が、3～4年おきに生まれたのです。兄姉たちは、今はもう、みな亡くなって、私一人しか残っていません。私の兄姉は、みな結婚しました。独身の者はいませんでした。

長兄は、塗装工でした。次兄は製粉機械製作のエンジニアでした。その下がワルターで、私と同じ機械工でした。その次のアルフレットは、商人でした。

姉たちは、みな主婦でした。彼女たちは、職業教育を受けませんでした。長姉は、フィービヒ印刷所 *Druckerei Fiebig* で、補助の仕事をしていました。どこかの店で客に商品を手渡すような仕事をしていたこともありました。その下の二人、アルマ *Alma* とエラ *Ella* は働きに出ずに、すぐに結婚したのだと思います。

一番下の姉は、第一次大戦の犠牲者です。彼女は苦労した末に、ある製袋工場で働きました。そこで袋縫いなど軍隊用の仕事をしていました。彼女の夫は戦死しました。彼は海軍の兵隊で、二人はハンブルク *Hamburg* で知り合いました。彼女は、ハンブルクで女中をしていました。次兄がハンブルク

のネルゲル&ケンプ社 *Nörgel & Kemp* に行つて、エンジニアとして働いていたので、姉を呼び寄せたのです。そこで彼女は、良い職について、素晴らしい男とも知り合い、結婚するつもりだったのです。そんな時に、1914年、あの惨事で、あつという間に彼はなくなつてしまつたのです。船は沈んでしまいました。可哀相な女の子は、そこに残されてしまつたわけです。そこで、彼女はまた家に戻つてきました。当時、もうだれも女中を雇うなんて事はできませんでしたから、ここの製袋工場へ行つて、縫い手として袋を縫つたのです。その後、彼女は、やもめの男と結婚しました。当時、若い娘がたくさん残つていたので。まったく多くの男たちが戦死したのですから。ほぼ一人の男にたいして十人もの娘がいたのですよ。

私の兄姉は、みな、おだやかな性格です。私のすぐ上の兄のアルフレットは、私よりも4才年長です。私たちは、あまり良い関係ではなかつたけれど、まあまあ理解合つていました。

第一次世界大戦後は、みんながツェラー通りの家に避難してきました。

つまり、ワルターが戦場から帰つてきました。ワルターはイギリスの捕虜生活から戻つてきたのです。1919年にイギリスの捕虜生活から解放されたというわけです。そこで、両親のところに転がり込んできたのです。

兄のヴィリー *Willi* は、神経性ショックを受けてきました。彼は、重砲隊にいましたが、ランス *Reims* で嵐に遭い、倒れたのですが、そのためにおかしくなつてしまつたのです。彼は、もうまったく、以前の彼ではなくなつてしまいました。彼は、フライブルク *Freiburg* の辺りの、ブライザッハ *Breisach* というところに精神病院があるのですが、そこからこの両親の家に送られてきたのです。そして、その後さらに、家からケーニツヒスルッター *Königs-lutter* に送られ、またそこを退院して、家に戻つてきたのです。彼は、ほんのちょっとした事で興奮しましたから、想像できると思いますが、母にとっては、それはまるで拷問を受けているようなものでした。彼は、健康な人間として戦争に行つたのです。エレガントな紳士として出ていって、廃人になつて帰つてきたのです。歩兵として、人間を馬鹿みたいに大量に消費するのを

理解できなかったのです。「榴弾砲の上へ行け」、「榴弾砲の下へ」などなどと命令されて、そんなご奉公がね、理解できなかったのですよ。彼は、1913年に兵隊になり、すぐに、1914年、最初の日に戦闘に出たのです。彼は、まさに活動的な兵隊でした。そして、戦闘し、あっと言う間にへし折れ、役立たずになってしまったのです。そんなことに、だれでもが耐えうるというわけではありません。彼は、戦争で壊されてしまった、本当の戦争犠牲者でした。彼は、51才の若さで亡くなってしまったのです。

3. 祖父母

父方の祖父母は、私が生まれた時には、もう亡くなっていましたが、母方の祖父母のことは、覚えています。祖父は、とてもゆったりとした人でした。祖母は、怒りっぽい人でした。例えば、私が祖父母の家に行くと、私を何かで喜ばせようとして、ラードを塗ったパンとリンゴををくれます。それは、私の弱い胃にとっては毒なので、そのパンを食べないでいると、彼女は、私をひどく叱りつけました。でも、私の胃はラードを受けつけられないのですよ。そんなことがあったのは、私が5才か6才の頃のことでした。彼女が私にそんな風に振る舞ったので、もう祖母との関係は終わりでした。私は、その後、もう二度と祖父母の家には行きませんでした。

祖父は、ブフラー社 *Firma Buchler* で働いていました。当時、この会社のことをキニーネ工場と呼んでいました。彼がそこでどんな仕事をしていたのかは、知りませんが、とにかく彼は、そこに長い間、勤めていました。彼は、住居（いわゆるフラット）と、彼らが住んでいた家を持っていましたが、それらは今は壊されてしまい、何も残ってはいません。このフランクフルター通り *Frankfurter Straße* は、今では、ほとんどが工場の建物と工場の敷地ばかりです。当時は、小さな家々が並んでいました。それらは、このキニーネ工場のもので、祖父は、そういった家の中にある住居を持っていたのです。

父方の祖父は、パイネ *Peine* のシュメーデンシュテット *Schmedenstedt* の

出身で、牛のプロカーでした。彼は、シュメーデンシュテットからヴェンデブルクに移りました。ヴェンデブルクに土地を持っていたのですが、それを私の父にではなく、他の息子に残しました。私の父は、都会の女と結婚したので、父の相続権が奪われたのです。父は、村の娘と結婚しなければならなかったのです。つまり、父の母親が父の相続権を否定したというか、奪ったのです。祖母は、長男が都会の女と結婚したことをずっと許そうとしなかったというわけです。

父方の祖父母が何才まで生きていたのかは、わかりません。母方の祖父母についても知りませんが、母方の場合は、いずれにしても大変長生きしたので、80才にはなっていたはずです。母方の祖母が働いていたのかどうかは知りません。

4. 両親の家の住居

<アイヒタル通りの住居>

私は、アイヒタル通り *Eichtalstraße* で生まれました。私の生まれた家は、今は、新しく建て直されています。その家は、私が生まれた当時すでに、かなり壊れていたのです。その家は、アイヒタル通りとクロイツカンプ通り *Kreuzkampstraße* の角にありました。家の番号は知りません。私の両親には、子供がたくさんいたので、しばしば引越しをしなければならませんでした。だから、どのくらい、この家に住んでいたのかはわかりません。

<ノイシュタットリンクの住居>

アイヒタル通りの家の後、ノイシュタットリンク *Neustadttring* に住んでいたこともあります。アイヒタル通りといってもよいほどに近い所です。これは、私の記憶にある2番目の家ですが、家の番号は知りません。

〈ロス通りの住居〉

その後、ロス通り *Robstraße* に越してきました。今のエルンスト・アンメ通り *Ernst-Amme-Straße* です。この家が通りの何番であったかもわかりません。

〈ゲッティング通りの住居〉

私たちは、その後、ゲッティング通り *Göttingstraße* 24番に越しました。その頃、兄が今のMIAG社、つまり当時のアンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社 *Amme, Giesecke & Konegen* で働いており、稼ぎがよかったので、高級な住居に入りたかったのです。だから、彼が家賃を持つことになったのですよ。それで、私たちはゲッティング通りに越してきたというわけです。その通りは、当時、まったく高級な家の並ぶ通りでした。バルコニーなんかがあって、蟬で磨きあげられた寄せ木張りの床とか、とにかく何でもあったのです。私たちは、よくこの床の上を滑って遊んだものです。

家の中の造りや外観などの記憶があるのは、ゲッティング通りの家からですが、この住居は、バルコニーのある部屋は寄せ木細工の床でしたし、とても素晴らしい住居でした。バルコニーも本当に素晴らしいものでした。他に住んだ住居にはどこにも、バルコニーは付いていませんでしたから。ゲッティング通りの住居には、はっきりと私の記憶にはありませんが、多分、4部屋か5部屋くらいあったでしょう。とても大きな住居でした。

そのうちに、この兄がハンブルクに行ってしまったのです。彼は、エンジニアになったのです。この兄は、たくさんいる兄たちの中でも上の方の、次兄です。それが1913年のことでした。そこで私たちは、まともやこの住居を出なければなりません。父は、この住居の家賃を払うことはできなかったのです。そこを出て、アマーリエン通り *Amalienstraße* 4番に越したのです。

〈アマーリエン通りの住居〉

アマーリエン通り 24 番に越してきたのは、私が学校に行っている時で、2 年目の時でした。私が入学したのは 1911 年ですから、1912 年にここへ越してきたのです。1912 年から 1917 年まで、アマーリエン通りに住みました。アマーリエン通りの住居は、3 部屋の住居でした。この住居専用の廊下がありました。地下室の物置もありましたし、屋根裏部屋の物干し場もありました。トイレは、階段室に共用のトイレがありました。浴室はありませんでした。当時の家には浴室というものはなかったのです。ゲッティング通りの住居にさえも浴室はありませんでした。しかし、ゲッティング通りの住居には、住居の中に専用のトイレがありました。しかし、このアマーリエン通りの住居は 1 階にあったので、外からの汚れや冷気に母が嫌気をさしました。1 階の住居なので、いつもひどく寒くて、大変だったのです。そこで、また引っ越ししました。

〈ペトリ通りとツェラー通りの住居〉

次は、1917 年にペトリ通り *Petristraße* 25 番の家へ引っ越ししました。ペトリ通りと次のツェラー通りの住居も 3 部屋の住居で、屋根裏部屋、地下室、専用の廊下なども同じようがありました。私は、この通りに住んでいた時に結婚して、家を出ました。この住居も母には気に入りませんでした。それでまたもや、1918 年にツェラー通り *Cellerstraße* 94 番に越したわけです。

〈ツェラー通りの住居〉

この家には女の家主代理人までいました。彼女が家の管理をしていたというわけです。ツェラー通りの住居には、台所に小さなバルコニーがありました。私は、親戚や他人と一緒に住んだことはありません。私の両親と兄弟のみでした。小さい頃は、平和でしたが、その後、戦後の混乱がありました。

つまり、ワルターが戦場から帰ってきたのです。1919 年にイギリスの捕虜生活から解放されたわけです。そこで、両親のところに転がり込んできたと

いうわけです。そして、兄のヴィリーも神経性ショックを受けて両親のこの家に帰ってきました。

5. 労働者居住地域の様相

ベッケンヴェルカー通り *Beckenwerker Straße*, ランゲ通り *Lange Straße*, ヴェーバー通り *Weberstraße* などは、労働者の居住地域でした。

ここら辺の地域は、純粋に労働者居住区でした。特に、フーゴ・ルター通り *Hugo-Luther-Straße* には、労働者しか住んでいませんでした。この通りは、今は、ヴェスト通り *Weststraße* と呼ばれています。この通りの命名の由来は、この通りが、西へ延びているからというだけのことです。ここにはルター工場 *Lutherwerk* があったので、労働者しか住んでいなかったのです。ルター工場は、当時、ブラウンシュヴァイクで最初にできた工場のひとつでした。それに、今はジーメンス社 *Siemens* の工場があるアッカー通り *Ackerstraße* には、マックス・ユーデル社 *Max Jüdel* がありました。当時、これらの会社の人々が、工業によってブラウンシュヴァイクを発展させたのですが、それに、MIAG 社つまりアンメ・ギーゼッケ&コーネゲン社が加わります。

それに1908年には、ビュッシング社が創立されています。いずれにせよ、1912年には、ビュッシング社は、最初のトラックを出荷しています。先ほど話したルター工場やヴィルケ工場 *Wilkewerke*, それにいろいろな工場ができました。マックス・ユーデル財団 *Max-Jüdel-Stiftung* は、今もまだあります。ハインリッヒ・ビュッシンク *Henrich Büssing* は枢密顧問官でしたが、彼は、最初は鉄道の信号扱所で働いていました。その後、今、ビュッシンク社があるビュッシンク通り *Büssingstraße* で、ハインリッヒ・ビュッシンク&ゾーン社 *Henrich Büssing und Sohn* を興し、鉄道の信号機関連の物をつくっていました。その後、トラック工場をつくりました。彼は、初めの頃は、洗濯屋を借りて、最初の車を4~5人の男と一緒に作ったのです。その後、最初のバスを作り、このバスは、ブラウンシュヴァイクからヴェンデブルク

まで走りました。これは、ブラウンシュヴァイクで最初の路線バスでした。このバスは、今のフォルクスワーゲン社のミニ・バスくらいの大きさでした。

6. 学校生活

第一次世界大戦の時は、私はまだ小さかったので、兵隊に行ってはいません。

1919年に、私は14才で学校を出ています。学校時代のことを覚えています。私にとって、それはまったく灰色の思い出です。

私は末っ子でしたが、上の兄たちが、ペスタロッツ学校 *Pestalozzischule* の教師たちと衝突していました。特に兄のワルターは、とても荒っぽい少年でした。それに兄のアルフレットがいました。私は末っ子で、その上がアルフレット、そのまた上がワルターです。ワルターは、いつもサボっていました。だから、ある時、そのことで教師のシャーフアー *Schaafer* に謝らなければならなかったのです。アルフレットの担任の教師がシャーフアーという名前でした。それは、1913年のことでした。私の兄は、当時、全校でもっとも有名なスポーツマンでした。昔は、セダン競技（：セダンは、フランス北東部の工業都市で普仏戦争の激戦地）*Sedan-Wettkampf* という戦闘競技がありました。

彼らは、いつも、今の教育大学のある、小さな練兵場でこの競技をやっていました。その練兵場は、昔はただの空き地だったのです。そこに、右と左に特別に観覧席が作られ、登攀用マストが立てられました。そこに学校の生徒たちが連れて行かれ、学校でスポーツに優秀な生徒たちが、その競技に参加したのです。私の兄は、いつもこれに出ていました。彼は、もちろんちょっと変わっていました。スポーツマンってのは、ちょっとした誇大妄想癖をもっているものです。……その教師は、彼を陥れようと思いました。というのは、彼が少しばかり天狗になっていたからだと思います。彼は、半分大人の体でしたが、教室の中に入ってくる時、その教師は背中を机のほうに向けて立っ

ていました。そして、兄を倒そうとしたので、兄は、ただ、胸の前を突いたのです。そうすると教師の方が机の上に引っくり返ってしまったのです。教師が逆に引っくり返ってしまったのです。そこで、もちろん、私の家のGという名前は、教師たちの間で有名になってしまったというわけです。

その後、私は、ケッフェル *Köffel* という名前の教師のクラスになりました。彼は、体操教師のシャーファーの友人でした。これは、私が何才の時だったか?……ランケガンク *Lankegang* という教師の後にケッフェルで、その後でしたから、1915年から1916年のことでした。ケッフェルは、つまりシャーファー教師の友人でした。そこで、私の父が社民主義者だということが話されたのです。そんな時に、私がこの学校に入学したのです。

このクラスで、私たちがもらった算数の本では、かけ算の「×」のしるしが、「・」と記されていました。そこで、私が、みんなの前でその本を読むことになり、12「かける」何々と読むところを、12「点」何々などと読んでいったのです。そこで、彼がどんな風に私を殴ったと思いますか? この「点」が、「かける」のしるしなんだと、私に説明するかわりに、彼は私を殴ったのですよ。彼は、いすの上に立って、あたかも、私が、彼を馬鹿にしたかのように、上の方からずっと私を殴り続けました。しかし、それは、復しゅう以外の何ものでもなかったのです。このケッフェルは、どうしようもないドイツ民族主義者でした。政治的な理由もあったのです。

学校で殴られるという経験は、私が6歳の時の、プレッセ *Presse* という名前の教師から始まっています。彼は、私を脚の間にはさみこみ、上から殴りました。いつも尻を殴ったのです。この男の変態的なところなのですが、私がびくっとすると、それがさらに彼を刺激したのです。

彼は、もう学校を出た女の子たちを、午後に来させていました。私たちは、2部制で授業を受けていたのです。午前に小さい子たちが2時間、そして午後の2時間が上の学年の子たちに当てられていたのですが、この午後の時間に女の子たちが招ばれていて、私たちの授業が終わった後、彼が私たちを殴

のを見ていなければならなかったのです。

みんなを殴ったわけでもなく、彼らの気に入らない子供たちを殴ったのですよ。特に労働者の子供たちが殴られたのです。つまり、下層の市民学校 *Bürgerschule* では、そうだったのです。下層の市民学校では、すべてが無料だったのです。当時、授業料もなかったし、いや、3カ月に1回、1マルク払っていたとは思いますが。その他には、本や他のものはすべて無料でした。みんな無料だったのです。中流層の市民学校 *mittlere Bürgerschule* では、両親はいくらか払わなければならなかったのです。この学校の生徒たちは、たとえば、機関車の運転手の子供たちとか、公務員の子供たちで、労働者の子供たちは、みんな、下層の市民学校へ行っていました。当時の学校制度は、そういう風だったのですよ。中流層の市民学校の子供たちの親は、裕福な人たちだったので、子供たちをそういう学校へやることができたわけです。

親たちは、子供たちを通わせる学校を選ぶことはできたのですが、お金を払うことができるかどうか、決定的だったのです。労働者は、そんなお金を支払うことはできませんでした。公務員の子供が下層の市民学校へ行くなんてことは、ありえませんでした。そんなことは、ありえませんでした。この下層の市民学校は、木のカタコト靴学校と言われた学校です。これらの学校が悪いということはないのですが、つまり教育の質は、ぜんぜん悪くはなかったのです。つまり、知能という点において、この学校の子供たちは、ちっとも劣っていなかったし、ここを終えた後に、あの、アウグスト広場 *August-Platz* の、今のケネディ広場 *Kennedy-Platz* の、中等学校へ行く子供もいたのです。あの中等学校には、選ばれた者だけが行ったものです。彼らは、10才の時にすでに、優秀だということを証明してみせたものです。この中等学校へ、まさに下層の学校からも、中流層の学校からと同じように、生徒が進学して行ったのです。しかし、彼らは、優秀なことを証明しなければならなかったし、とくに、ひいきでなければならなかったのです。もちろん、いつも、教師がそうするつもりがあるかどうかが決定的でした。

私は、ペスタロッツ学校に入学しました。つまり、ペスタロッツ通り *Pestalozzi-Straße* の下層の市民学校です。そこから、両親が1917年か18年に引っ越したので、私ももちろんペスタロッツ学校からディースターヴェーク学校 *Diesterweg-Schule* に転校しました。ディースターヴェーク学校は、ペスタロッツ学校と比べて、昼と夜ほどの違いがありました。ディースターヴェーク学校の教師たちは、ペスタロッツ学校よりもずっと、人間味がありました。この先生たちは、ペスタロッツ学校のようにありませんでした。ここでは、監察官だけが、そうでしたよ。彼の息子たちは、私の世代なのですが、一人は、ハノーファーで法務大臣になり、もう一人は、弁護士になって、事務所がカットレップル *Kattreppel* にありました。

ディースター学校のシュネッカー先生 *Schnecker* は、エルパー *Ölper* に住んでいました。彼は、本当に人間味のある人でした。

私は、もう一人の生徒と一緒に、ディースターヴェーク学校からペスタロッツ学校に転校しました。私たちは、二人ともディースターヴェーク学校の生徒たちよりも良くできました。ペスタロッツ学校では、殴られながら、しゃむに覚え込まされたからです。

昼と夜ほどの違いというのは、雰囲気全体が違ったのです。教師たちは、例えば、スタンチュ *Stantsch* 先生は、自然愛好家でしたが、彼は、自分の授業の時間になると、「みんな、さあ、一緒においで、外に行くぞ」と行って、私たちを外に連れ出しました。ディースターヴェーク学校も、ペスタロッツ学校と同じタイプの、下層の市民学校でした。

1914年までの子供時代は、私にとっては、本当に悲しい時代でした。良い思い出は、何もありません。教師たちが、私をひどく苦しめたからです。それは、教師のプレッセから始まりました。その後、1年か2年間、ランケガンク先生のクラスでしたが、この間は、素晴らしかった。ここで、ほとんどの事を学びました。それから、あの不格好な大男のケップェルに受けもたれたのです。彼は、ひどい人間でした。そして、ヴァルネック *Warnecke* です。

彼は、もっとひどかったのです。彼は、農民の息子で、猪首の男でした。ああ、今でもおそろしいのです。彼には、本当に恐ろしさを感じましたとも、この男には。

そこで、私の母が私を連れて、学校の監察官 *Schulinspektor* の所に行き、私の尻のみみずばれを見せました。そうしたら、監察官が彼を呼んで、彼は、そこに来なければならなかったのです。それ以来、もう殴られなくなりました。彼は、私を放っておいてくれました。彼は、椅子に座れないほどひどく、私を殴ったのです。母が私の体を洗った時に、私の尻にみみずばれができているのを見つけたというわけです。それで、彼女は、監察官の所に走ったのです。教師たちは、家で言いつけることができないほどに、私達をひどく殴ったものです。言いつけたのがわかったら、もっとひどく殴られたのです。だから、母は、私と一緒に監察官の所へ行ったのです。当時は、学校監察官といいました。それで、彼は、ヴァルネッケを処罰しました。殴るのは教育方法ではありません。この監察官は理性的な男で、オッパーマン *Oppermann* という名前でした。彼は、教師に「そんなことは、教育方法ではありません。殴っても、子供たちには何も教えることはできませんよ、暴力では」と説教したものです。

7. 子供時代の労働と遊び

私の両親には、9人の子供がいましたが、子供の頃、私は働いたことはありません。しかし、石炭を地下室の貯蔵庫から、家の中の住居に運ぶのを手伝ったりはしました。石炭を運ぶのも手伝いました。父がリアカーを持っていましたが、私はここのトゥルム通り *Turmstraße* のガス工場へ行ったのです。今は、このガス工場は大きな規模になってしまい、当時の建物など何も残ってはいませんが、このガス工場で、コークスを買ってきたのです。ここで買うと、数マルク分、安かったからです。それに父の庭のために、馬糞も集めました。秋になって、父が土を掘り起こすとき、毎晩、私たちが車にいっ

ばいの馬糞を集めてくるのは、当然のことだったのです。アルフレットと私がいつも馬糞を集めに出かけました。いつもブラウンシュヴァイク資源再生所、つまりゴミ収集所の厩舎へと行ったものです。当時は、何でも馬車で運搬しました。馬車が外へ出る時間は、これこれの時間と決まっていたので、その時間をみはからって行きます。馬が動いて糞を落とすと、それを私たちが、すばやくきれいに掃き取ります。そうしてやると、リアカーの車はすぐにいっぱいになりました。私は7才、8才か9才でしたが、修業に入るまで、馬糞集めをしました。家事は母がしていましたが、家事の手伝いという、急ぐときに、お使いに出て、何かを買って来るくらいのものでした。普通は、買い物は、母が自分でしていました。だから、自由になる遊び時間は、たくさんありました。

子供の頃、一緒に遊んだのは、ほとんど同じ年頃の子供たちでした。兄たちとは、年がはなれていましたし、私が10才の頃は、アルフレットは学校を出ていましたから、もう一緒に遊ばせませんでした。私は、他の子供たちよりも自由になる時間は多かったと思います。とくに、母は、いつも「もう、家にいないで、消えちまいなさい。近所に迷惑をかけないうちに」と言ったものです。母は、男の子は、思う存分暴れるべきだと言っていました。だから、「うんと遠くへ行っって遊びなさい」と言いました。家の前の通りではなくです。今の子供たちのように、家の前や中庭では遊ばせませんでした。親の目に入る所からは消えて、ずっと遠くへ行っったものです。

当時は、町の中のいたる所に、大きな畑がありました。秋には、そこで走り回ることができたのです。例えば、私の体が成長していた時期は、アマーリエン通りに住んでいましたが、そこにはアマーリエン広場があって、それは、素晴らしい原っぱでした。今は、ここを緑地にしてあります。今じゃあ、ここに子供など見ることはありませんが、私たちは、昔、その原っぱで飛び跳ね回っていました。今は、緑地になって、子供は動いていないし、芝生へ

の侵入禁止だなんて、まったく馬鹿げています。そんなことは、当時はありませんでした。当時は、この近所に、今は、もうみんななくなってしまいましたが、まだまだたくさん森がありました。母は、私たちを放っておいてくれましたから、思う存分騒ぎまわりました。今の子供たちは、それを思うと可哀相なものです。この環境がです。

1914年、戦争が始まる前の最後の平和な年でしたが、4週間の学校の長期休暇がありました。党と労働組合が子供たちを各城門に集合させて、そこからピクニックに連れて行ってくれたのです。

たとえば、アマーリエン広場に、週に2回、集合し、そこから音楽付きでパーヴェルシェン・ホルツ *Pawelschen Holz* まで行きました。まだ当時は、森があったのです。今じゃあ、少しばかりのブッシュがあるくらいですが、素晴らしい森だったのです。今はレストランになっている所は、昔は、とても大きな庭でした。子供たちは、そこへ連れて行かれて、コーヒーとケーキを好きなだけ飲んだり、食べたりしたのです。その費用は、労働組合と党から出ていたのです。

当時は、たとえば、労働者合唱協会などもありました。はっきりと覚えています。ご婦人方も男の人たちも、とても感激して、彼らの唄の夕べに行ったものです。労働者合唱協会「アイニヒカイト」*Einigkeit* という名前などの協会がありました。労働者の間に、ある種の共同体があったのですが、今日では、そういったものは、もうなくなってしまいました。

演劇協会などもつくって、労働者は、文化の分野でも独自の社会をつくりました。彼らは、当時、今のレーベンリンク *Rebenring* と呼んでいる、レーベン *Reben* にあった、ガンプリヌス・ホール *Gamprinushalle* で上演しました。ガンプリヌス・ホールと呼んでいたけれど、そこでこの労働者の演劇協会が客演して、切符はいつも売り切れるほどに、大入りでした。この労働者演劇協会は、「アイニヒカイト」とか「アイントラッハト」*Eintracht* という

名前だったと思いますが、この演劇協会は、いずれにせよ、今も残っていると思います。しかし、まったく小さな規模です。

8. 親子関係

私は、両親のうち、母の方が、より良く理解し合えました。父とも良く理解はし合いましたが、母は、精神的に生き生きしていたのです。

父は、一面的でした。彼は、ただ自分の庭のことしか頭になかったのです。とくに最後の頃ですが、私は年老いた父しか知らないのです。母は、子供たちを分けへだてせず、どの子も平等にあつかいました。

子供の頃、両親と個人的な問題について話し合ったことはありません。両親から性に関して説明されたこともありません。その関連では、今の子供たちのように、授業を受けませんでした。授業方法は、今のとは、まったく違っていました。今は、ラジオやテレビなどがあります。

今の若者たちは、色々な物に注意すれば、私達の頃の若者にくらべると、もっと良く自分をのばすことができます。そんなことは、私たちの頃にはありませんでした。いい教師がいたら、私たちは動きやすかったし、良い教師がいなければ、何もなかったのです。

私の母は、父に比べて、精神的に良い状態だったし、生き生きしていました。母のそんな所を私が受け継ぎました。父は、たくさんの子供たちのためにただ働き、いわば生存競争によって鈍感になったのです。彼は、もう何かに関心を寄せることはなくなったのです。私が思春期になったとき、父は60才でした。12才の若者と60才の男が、まだうまく理解し合えるものかどうか、考えてみて下さい。子供が、こっそりと、何かを食べてしまっても、私の両親は、9人もの子供がいて、慣れっこになっていたので、大騒ぎをするほどのショックは受けませんでした。そんなことをしたことは、ありませ

んでした。

私は、一度、窓ガラスを壊してしまったことがあります。高い遊びについてしまいましたが、それは起こってしまったのです。私は、おしおきは受けませんでした。私は、両親から殴られた事はないのです。殴られたのは、学校だけです。まったく、教師たちの私たちへの扱いは、とてもひどいものでした。

両親の家には、いつも金がなかったので、家で金の話をする必要なんてありませんでした。私の家だけでなく、一般的にそうでした。だから、昔は、お互いの関係も今日よりも良く調和がとれていたのです。

9. 結婚

私は、1934年に結婚しています。しかし、その最初の妻はもう亡くなっているのです、今の妻は2番目の妻です。

最初の妻は、1909年3月23日に誕生し、1968年に亡くなりました。マリー・イエーネ *Marie Jähne* という名前でした。彼女もブラウンシュヴァイク生まれで、生粋のブラウンシュヴァイクの人間です。妻の希望で教会で結婚式を挙げました。しかし、私は、結婚式後すぐに教会から脱退しました。

妻の宗教も新教のルター派でした。妻の職業は、歯科の補助看護婦でした。ブラウンシュヴァイクの歯科で働いていましたが、子供が生まれた後、1941年に仕事をやめました。彼女の父は、市営牛舎の守衛で、母は主婦でした。結婚前、妻は、フッテン通り *Huttenstraße* の両親のもとに住んでいました。

私の最初の妻は、ぜんぜん政治的ではありませんでした。どこの協会にも入ってはおりませんでした。

最初の結婚の時、当時は住居が不足していて大変でしたが、幸いにも妻の勤めていた歯科医の患者に建設業者がいて、彼が私たちに集合住宅の中の住

居を仲介してくれました。この住居は、当時、フリーガーフィアテル *Flieger-
viertel* と呼んでいた地域にありました。この地域は、今のノルトフィアテル
Nordviertel です。当時は、グンター・ブリュッヒェ通り *Gunther-Blüche-
Straße* といいましたが、今、何という名前の通りになっているのかは、知り
ません。

私は、その家の管理人の職を引き受けました。それが入居条件だったので、
そうしなければ、入居できなかつたのです。しかし、その後、持ち主が、こ
の家をベルリンのノルトシュテルン保険会社 *Nordstern-Versicherung* に売
却したので、この仕事をやめることができました。しかし、新しい持ち主も、
また私を雇おうとしたのですが、断りました。私はこの仕事がほとんど厭に
なっていたのです。この神経の高ぶつた人々の住む家で、家僕の役を演じる
なんて、吐き気がしました。賃金が、本当にただの小遣いにも満たない、チッ
プ程度の職だったので。だから、こんな職は放棄しました。でも、住居に
はそのまま住み続けることができました。その後、戦争が終わった 1945 年に、
ここを出なければならなかつたのですが、サッカー仲間がウィルヘルム・ボー
デ通り *Wilhelm-Bode-Straße* とヴァーベ通り *Wabestraße* の角の家に住ん
でいたのですが、彼はこの家の持ち主でもあり、この家の 1 部屋が空いたの
で、私達はラッキーなことに、ここに入居できたのです。

私たちは、結婚前、1928 年から婚約していて、1930 年に結婚するつもりで
した。しかし、私が失業してしまったので、34 年まで待ったのです。私たち
のどちらもお互いに婚約を望んだのですが、さあ、結婚しようと言ったのは、
私でした。

私と彼女の間には、息子が一人、生まれました。息子は、1941 年 4 月 23 日
にブラウンシュヴァイクで誕生しました。彼はユルゲン *Jürgen* という名前
です。彼にも、また息子がいます。彼は、働いているのは、ザルツギッター
Salzgitter にあるフォルクスワーゲン社の工場で、車のコントロール、つまり
最終コントロールをしています。

私は、最初の妻の死亡後、1973年に再婚しましたが、もう7年になります。

2番目の妻は、テューリングン *Thüringen* 生まれの生粋のテューリングンの人間で、1929年9月29日に、テューリングンのアイゼンベルク *Eisenberg* で生まれました。

この妻の結婚前の名前は、エルナ・ヘーンライン *Erna Hähnlein* でした。私たちは、ブラウンシュヴァイクで結婚しましたが、教会での結婚式は挙げませんでした。私たちは、二人とも教会から脱退しています。彼女は、いわば「宗教」を学んでいません。戦争中に大きくなったのですが、「宗教」の授業は、授業の時間割からはずされたのです。彼女は、1945年に堅信礼を受けました。堅信礼の前に8週間、多分、少し「宗教」の授業を受けました。とくに堅信礼を受けたことが負担になったことはなかったそうですが、後に、経済的な負担から教会を脱退しました。

10. 性・避妊・妊娠中絶

<性>

私は、家で、両親から性に関して説明されたことはありません。すぐ上の兄のアルフレットからは、説明を受けました。そういう類の話は、一人からまた別の者に口から口へと伝えられたものです。アルフレットは、私よりも4才ほど年上ですが、彼はそういうことについて、すでにたくさんを知っていました。彼は、もうご婦人方から引っ張りだこだったのです。他に男がいなかったから、彼女たちは、若者を頼りにしたのです。彼が私に説明してくれたのは、私が学校を出た13才の時です。それ以前にも少し、私たちは、そのことについて話したのですが、しかし、私はそれまでまったく無邪気で、人間には2種類あるということを知りませんでした。本当ですとも。この方面では、私たちは、まったくおくてでしたが、それをとくに残念と思っ
てはいません。

私は、13才で知ったわけですが、それで十分に早熟だったと思います。そ

の時、私は、もう女の子と知り合いになっていたのです、兄に質問したのです。この年頃になると13才ですから、もう一つの性に関心を持つものなのです。もし、兄がいなかったら、多分、母親に尋ねていたことでしょう。でも、私には兄がいました。兄のことは良く知っているし、遠慮することのない間です。彼とあだこうだと話しているうちに、啓蒙もしてくれたのです。

結婚前に性関係を持つチャンスは、たくさんありました。私は美男子だったのです。家の玄関前に2人か3人の女の子が立って、口笛を吹いて、下へ降りてくるようにと私に合図を送って、待っているのです。私たちの家の後ろ側には出口がありました。前から後ろへ抜けるようにできた家の構造だったのです。そこで、私は後ろの出口を通り、板垣と次の板囲いを乗り越えようと、2〜3軒先の家まで行ってしまいます。女の子たちは、まだ家の前に立っているというわけです。一度に、そんなにたくさんの女の子の相手はできませんから、逃げ出しました。多すぎました。彼女たちは、私のことを好きでした。だからといって、私がどうにかできたわけでもありません。まあ、私は、家の前で大騒ぎはしたくなかったのです。そんなことが起こっては、ばつが悪いですから。

私が初めてキスをしたのは、14才の時です。でも、それはまったく無邪気なものでした。相手は、学校の同級生で、可愛い女の子でした。私たちは、もうお互いに知り合っていました。彼女は、いつもウサギに餌を与えに、庭へ行かなければならなかったのです。そんな時、いい香りの空気の中で、彼女を腕の中に抱いたのですが、それ以上のものではありません。

私の初めての性体験の相手は、年上の女の子でした。彼女は17才で、私をまあ誘惑したのです。私は、その時、14才でした。私が14才で、彼女が17才でした。彼女は、その当時、私たちがパンを買っていたパン屋の親方のもとで、働いていました。そして、私を、いわば誘惑したのです。

〈避妊〉

避妊については、私たちは「気をつける」ということしか知りません。つまり、途中でやめるということ。射精の前にやめるということ。自制心というものがありません。両親が9人の子供を持って、どんなに苦労したかを知っているのに、同じように苦労をしたいとは思いませんでした。もう一人、子供を世に送り出さないだけの自制心を、持ち合わせていたというわけです。コンドームは高すぎて、それを買うだけのお金は持ち合わせていませんでした。

私の両親が避妊具を使用していたかどうかは、私はまったく知りません。兄は、避妊具のことや事前に性器を引き抜くことを話してくれました。私が、そのようなことを13才で知ったのは、当時の事情では、かなり早いほうだと思いますが、それは私に兄姉がいたからです。よその家の子供たちで、私よりも良く知っている子供もいました。彼らに比べたら、私などは孤児のようなものです。とくに中等学校の生徒やもっと上の学校の生徒たちは、私たちとはくらべものにならないほど、ずっと良く知っていました。彼らに比べたら、私たちなど、無邪気なものでした。特にギムナジウムの生徒たちは、早熟でした。私たち下層の市民学校の生徒は、本当に無邪気でした。

〈妊娠中絶〉

私と最初の妻は、ノイエン通り *Neuen Straße* にあるアトランティック・カフェ *Atlantikcafe* でダンスを通じて、知り合いました。その時、私は24才でした。

当時、妊娠中絶については聞いたことがありますが、関心は、ありませんでした。妊娠中絶などについては、おおっぴらには話されず、囁かれる調子で話されるだけでした。

妊娠中絶をするということでは有名な、2〜3人の医者がありました。しかし、それは、秘密を守るという暗黙の了解のもとに話されていたのです。妊娠中絶の手術をした医者として知っているのは、患者にみな「君は、」と親しげに

話しかけていたけれど、ええーと、何という名前だったか。ナチスが彼をつかまえようとしたけれど、婦人たちは、彼を売り渡さなかったのです。名前を思い出せません。彼は、婦人たちのあいだで、とても有名でした。

婦人たちは、彼を裏切らなかつたのです。彼も実際に大騒ぎすることなく、彼女たちを助けたのです。彼はユダヤ人でしたが、その後、逃げました。彼は、逃げなければならなかつたのですよね。そういった事についての私の立場は、避妊するつもりなら、まず事前に気を付けること、第二に、医者がそれを処置する事にも賛成ということで、絶対にそれに反対はしません。それは、当然のことで、今、教会が、なんだかんだと指示しているような内容は、くだらないのです。つまり、いずれにしろ、運悪く、妊娠してしまい、子供が生まれてくるべきでないなら、医者が介入してもよいと思います。私の兄弟たちも私と同じ意見でしょう。

11. 職業生活

私は、1919年に修業を始め、1921年に終わりました。1923年の秋まで働けたけれど、そうこうするうちに、大変な時期になりました。そこで親方が破産したのです。それで、私はできることは、何でもして働き、稼ぎました。ある鉄の再生工場で、つまり、古屑鉄業ですが、14日間、チップングハンマーなどの工具を修繕したりしました。それに、当時は、何でも馬車で運んでいましたから、馬車の駐車場の、餌桶や飲み水用のバケツ吊り装置なども修繕しました。まだトラックはなかつたのです。ビュッシング工場があって、トラックを作っていましたが、ブラウンシュヴァイクには、トラックは、まだ多分、4台か5台のものでした。というのも、最初に生産されたトラックは、みんなロシアとトルコの戦争用に納入されましたからね。ビュッシング氏は、それで一財産を築いたのですよ。それで金持ちになったのです。それから、29年からの恐慌期が始まったのです。

私は、1923年に失業し、1925年にビュッシング社で機械工として働き始めました。ビュッシング社では、工場の修理部で、1930年3月まで働きました。それから1932年11月まで失業していました。だから、23年秋から25年春までの、1年以上にわたる、長い失業生活を2度も送ったのです。その間、あちこち至る所に仕事を探しに行ったものですよ。もっとも悲しかったのは、父が70才になってもまだ働かなければならなかったことです。そして、父が稼いでいたので、私は1ペニヒも失業手当を受けなかったのです。私は両親の家にはいたので、父に養われていたわけです。つまりは両親に養われていたということです。それがどんなに辛いものか想像できるでしょうか。私がおの前の短期間の仕事で獲得したもの全てが、無になったわけです。若者が自立をしなければならない、まさにこの若い時期に、そのような悲しい経験をし、本当にこたえました。しかし、そのようなことは、私の身の上だけに起こったわけではありません。

私と同じ年頃の者皆に起こって、みんなが失業したのです。約700万人から800万人が失業したのですよ。この時期、私は自分の住居は持っていませんでした。両親の家以外の何処に住むことができたでしょうか？ 私の回りでは、もっとも悲しいことがたくさん起こっていました。

まだ私がとても若かった頃、ガルテン通り *Gartenstraße* に集まりました。つまり、大勢の失業者が集まって、ガルテン通りを出発点に、抗議行進をしようとしていたのです。そうしたら、とつぜん、ブラウンシュヴァイクと近隣中の警察官が、私たちを取り巻き、私たちは、ミュンツ通り *Münzstraße* へ、つまり警察署に連れて行かれたものです。

私は、失業中は、ある零細規模の親方のもとで、臨時雇いの仕事があると、働きました。しかし、いつも3週間から4週間くらいの雇われ仕事でした。それくらいの仕事では、その稼ぎで、仕事道具を修理したり、どうしても必要な靴を一足買える程度でした。

1930年の経済恐慌時の2度目の失業前は、労働組合に加入していましたが、この2度目の失業時に、初めて労働組合から20週間分の支援金をもらいました。私の稼ぎは良かったので、失業手当も悪くはありませんでした。ええ、私はなんとか努力して、うまく切り抜けたのです。労働組合からの支援金がいくらだったかは、覚えていませんが、いずれにしても結構な額だったと思います。なんとか生活していくのに大いに助けになったのですから。2度目の失業は1年半続きましたが、その間、私はずっと失業手当を受けていました。それに労働組合からも20週間、援助金をもらっていたわけです。その後は、もちろん先細りでしたが、だんだん質素になっていくものです。バカなことに、それ以前は慣れ親しんでいたタバコも、吸わなくなりましたし、だんだん質素になりました。

しかし、付けくわえると、私は、戦後の、1950年代始めにマイスターになりました。というのは、私は正規の職業教育を受けた機械工でしたが、ビュッシング社の板金部に回されました。ビュッシング社は、今の東独地域にあった工場を放棄しなければならなかったのです。つまり、東プロイセンのエルビング *Elbing* に自動車の車体製作工場があったのですが、ロシアに占領されたからです。私は板金の修業もしたのですが、ここでは板金工が不足していたために、板金をすることができたのです。板金はとても繊細な感覚のいる仕事です。それで、仕事に慣れた後、私はマイスターになったのです。

その後、気管支喘息がひどくなったのをきっかけに、1968年に年金生活に入りました。

12. 宗教・政党・労働組合・帰属意識

〈宗教〉

私の名前はリヒャルト *Richard* です。私は1905年に生まれました。私が生まれた時、父はもう48才でした。母は42才か43才でした。

父は、まだ教会にとどまっていた。新教でした。母の宗教も、新教です。

私は、新教で洗礼されましたが、1924年か1923年頃に教会は脱退しました。

私は、1919年にペトリ教会 *Petrikirche* で、堅信礼を受けています。私たちは木のサンダルで学校へ行き、堅信礼にも木のサンダルで行きました。今の若者たちは、好きで木のサンダルをはいて、歩き回っています。当時の私たちには、それをはかなければ他の靴はなかったのです。当時、私たちは帆布靴をもっていました。つまり、帆布と厚い木の底の靴です。皮製品がなかったからです。私の兄姉はみな、堅信礼を受けています。青年式をした兄姉はいません。青年式は、第一次大戦後に始まりました。だから、私の息子には、青年式をさせました。

当時、私たちはまだこのブラウンシュヴァイクでルターの新教の、ルター派教会に属していましたが、「勝利の冠の中の君に祝福を」という唄を毎朝、歌わなければなりません。「カイザーは、優しい男で、ベルリンに住んでいる。だから、私は、今日中にそこへ行くのだ」という歌詞で、それが私たちの毎朝の祈りだったのです。まったく厳密にドイツ・ナショナリズムです。もし、だれかが一緒に歌わなかったり、十分に大きな声で歌わなかったりすると、すぐに棒で殴られたものです。本当のことですよ。

社民主義者の家庭の子供たちにとって、まさにこれは簡単なことではなかったのです。

〈政党〉

私の両親の家では、政治については、たくさん話しました。父は、いつもいろんな事について話しました。「宗教は毒だ」とかね。「お前は、宗教については、何も気にかけるべきことはない。宗教の事なんて、何も知ることはない。他のことを一生懸命にするんだ。他のことを何でも勉強しなければならないのだ。だから、宗教なんて放っておいていいんだよ」と言っていました。

た。

私の父がいつも『フォルクスフロイント』‘*Volksfreund*’を購読していたのを覚えています。『フォルクスフロイント』は、いつも差し止めをくらっていましたよね。つまり、『フォルクスフロイント』は、ウィルヘルム *Wilhelm* に反対する論調の記事を出したので、即刻、発行禁止になったのです。今日では、そんなことはありません。当時は、まった単純に独裁的に啓蒙活動を禁止したのです。

私の家では『フォルクスフロイント』を購読していて、私たちも熱心に読んでいました。この新聞を読むことが、私たちの政治の授業でした。私の家では、『フォルクスフロイント』以外には、有料の新聞は、購読していませんでした。しかし、もちろん労働組合の『木工労働者新聞』は、ありました。

母は、ウィルヘルム・ブラッケ *Wilhelm Bracke* を尊敬していました。母は、個人的に彼を知っていたからでした。父は、熱狂的にアウグスト・ベール *August Bebel* を尊敬していました。

私は、1920年代、ヘルマン・ミュラー *Hermann Müller* をとくに尊敬していました。彼は、当時、首相でした。そして、その当時、私たちは、労働者として、素晴らしく良く金を稼ぐことができましたし、物価も、とても良かったのです。当時、4分の1キロの挽肉を、しかも品質の良いのを、18ペニヒで買うことができました。当時、残業をすると、2～3時間分の残業代の50ペニヒで、ビールを1びんと4分の1キロの挽肉と数個のパンを買えるな、と思ったものです。

私は、ヘルマン・ミュラーは、個人的に知っていたわけではありませんが、彼は、実際に有能な政治家だったので、尊敬していました。つまり、SPDの立場から、また私の個人的な立場から見て、彼は有能だったということです。当時、私は、現実的なことを考えていたので、亡くなった人のことは、考えに入れていませんでした。ヘルマン・ミュラーは、立派な男でした。しかし、

残念なことに、彼はとても早くに亡くなりました。彼は、2度にわたって、首相を務めています。当時、私は、彼が早世したのを、大変、残念に思ったものでした。

ナチスの時代、だれも自分の意見を言うことは許されませんでした。しかも、言ったとしたら、殺されていました。すぐにヴァーデンシュテット収容所 *Wadenstedt* の第21 宿舎に入れられています。そこには、バラックがたくさん並んでいるのです。もし、注意深くしなかったら、ここに入れられるのです。そして、再び、ここから出てきた時には、彼はもう一言も話さなくなっています。彼らは、精神的には死んでいました。そこで、拷問されてきたのです。

私は、工場で様々な作業をしました。最後に、クヴェルム *Querum* で、飛行機用モーター工場にいました。この工場もビュッシンク社に属していました。そこで、一人の同僚がいました。彼は、以前は、すばらしく輝いていたのですが、少しばかり、目立ったので、引っ張っていかれたのです。しかし、4週間後に戻ってきたとき、彼はもう一言も話はしませんでした。このような人々は、本当に壊されてしまったのです。完全に壊されました。こんな事をしたならず者たちは、戦後、偽の証明書を持って、みんなどこかに潜り込みました。そういうことも、すべて準備されていたのです。多くの者は、発見されましたが。(最近、発見された) こういった輩の、ハインリックソン *Heinrichson* とかいう名前の男でしたか、本当に恥ずかしく思います。

非常に多くの国民がこういった輩に対して責任をもたなきゃならないなんて、本当に恥ずかしく思います。そういった人間が、まだ英雄視されるなんてことは。こういった人間は、まったく自尊心がないのです。あの無頼な男がしたことを見たらね。経験から私は知っています。私の義理の姉は、カスターニエン・アレー *Kastanienallee* に住んでいたのですが、この大通りは、ブッフホルスト *Buchhorst* の後ろの射場へ続いています。

それが軍の施設だと知らない人が、そこら辺をうろついていて、軍の車に轆かれると、ブッフホルストの後ろの射場でバンバンという音がしたそうで

す。つまり、そこで轢かれた人は、射殺されたのです。誰も戻って来ることは、ありませんでした。そういうことが毎日、起こっていました。又、あのヴァーデンシュテットへの運搬もです。

ある男のことを思い出しました。その男の祖母はユダヤ人だったのですが、彼は、私の職場で働いていました。ナチスは、明らかに密告をうけたのですが、彼も強制収容所に送られねばならなかったのです。ナチスは、その若い者がどんな人間かなんてことを知ろうともしません。彼は、とても陽気な男でした。「さ、これから収容所へ行くんだ」などと聞いたら、彼は、気が狂いそうだったでしょうに。その不安たるや……。私がそれをどんな風に体験したかなんて、口で説明などできません。そんな場面を見てしまうと、生涯、忘れません。

そのほかにも、私が、冬に医者に行った時のことです。戦争中です。私はレーバツハー通り *Lebacher-Straße* に沿って歩いていたのですが、ちょうど、爆弾を一発落とされた直後の場所に来ました。そこら辺の家々はみな壊されていました。そこにボロ布を身に着けたユダヤ人の少女たちがいて、そこで石を積んで、道を空けていました。体の弱っているような14,15,16才くらいの少女たちでした。みんな、(ユダヤ人であることを識別するための)星を付けていました。それを見ていなかったら、信じることはできないくらい、ひどい様子でした。目の下にくまをこしらえ、餓えていたにちがひありません。そこには、SS(：ナチの親衛隊)の男たちが立っていて、彼らは作業をしてはいません。少女たちは、作業の手を休めると、すぐにあばら骨に拳骨をくもらいました。他の人々も、このようなことを知っていたし、見ていました。だれも知らなかったなんて事は、そんな馬鹿な事は、ありません。そんな事を言ったら、大嘘つきです。毎日、仕事が終わった後に、私と同じように、他の者も経験したのです。みんなが知っていましたとも。

例えば、当時、私の妻が、歯医者で治療をしていた時のことです。ある牧師がいたのですが、彼は、「私はドイツ人であることを恥じます。」と声に出して、言ったのです。つまり、彼もユダヤ人への迫害について聞いたからで

す。それを、今日、みんなは、知らなかったことにしているのです。まったく、くだらないことを言ってるものです。もし、これらの人々が、「私は、何も聞いていませんでした」なんてことを言うとしたら、それらは、みんな嘘です。簡単に、そのようなことを聞かされていたのです。

あまりに多くの人々が、迫害されたので、人の口から人の口へと伝わっていったのですから。あまりに多くの有名な重要人物がです。ここのブラウンシュヴァイクでもです。あのマッティス・タイセン *Matthis Theissen* は、建設労働組合の指導者でした。彼は、ひどく殴られて、ここのザンクト・ヴィンツェンツ *St. Vinzenz* 病院で、浴槽の中で、なんとかもたせることができたのです。それほどひどく殴られたということです。痛みで死なないように、浴槽に横たえなければならぬほど、ひどく殴られたのです。手当を受けたけれども、彼は死んでしまいました。

あるいはハインリッヒ・ヤスパー *Heinrich Jasper* です。当時の、ここの私たちの大統領だった SPD のヤスパーです。彼もベルゲン・ベルゼン(収容所) *Bergen-Belsen* で殴り殺されました。人々は、今日、当時何が起こったのか、知りたがりません。「何が起こったのか、そんなことは知らなかった」とは、誰も、私には、言えません。それは大嘘だからです。みーんなが知っていたのです。アウシュヴィッツ *Auschwitz* についても、もちろん、知っていたのです。それについても、口から口へと伝わっていたのです。そうでなければ、どこから私は、そんなことを知ったというのでしょうか。私は、終戦前に、これらの人々が、ブッヘンヴァルト(収容所) *Buchenwald* などで、ガスで殺されて、焼かれているということを知っていました。みんなが知っていましたとも。私は、しかもヘルムシュテット *Helmstedt* のリーゼベルク村 *Rieseberg* のことも知っていました。

あのナチスのならず者どもは、人々を殺したのですよ。私たちは、あまりに力がなくて、闘えませんでした。うまーく立ち回らなければならなかったのです。ある同僚と何か話して、そこにまた誰か来ると、話のテーマを変えました。そうでなければ、そいつが、私たちを密告するだろうということが

わかっていたからです。本当にそうだったのですよ。

職場で、「ああ、おい、お前、また何々だってこと、聞いたか?」「うん、本当に……だ」なんて話していると、連中がそばに寄ってくるのです。スパイしようとそばに寄ってきたものです。

というのも、彼らは餌を投げ与えられて、ナチスに引きずり込まれたからです。このコンサートハウスは、昔はザルツダールマー通り *Salzdahlumer Straße* にありました。今はベークラー通り *Böcklerstraße* にありますが、そこで集会がありました。彼らは、NSDAP (*Nationalsozialistische Deutsche Arbeiterpartei* 国家社会主義ドイツ労働者党) から、そこに招待されたのです。私自身も、自分で見たし、体験したので、そのことを知っているのです。そこで、「君たちは長靴やズボン等すべてを割賦払いで手に入れることができし、仕事もある」とか、長ったらしいおしゃべりで勧誘をうけて、最後にソーセージとポテト・サラダをもらって、黨員になったのですよ。そんな風にして、ナチスはこれらの人々を釣ったのです。そうして、彼らは大挙して入党したのです。たとえば日曜日の朝、当時のヴェンデンリンク *Wendenring* を通って、私の許嫁の所へ歩いて行くと、彼らの一団が行進してきます。先頭にユニフォームを着た者たちが、そして後ろの方には新入りがついていました。つまり、彼らはまだユニフォームを持っていなかったのです。新入りとわかるのですよ。14日後には、もう彼らはみんなSA(:ナチの突撃隊)のユニフォームを着ていました。

彼らはいつもSAの旗を前方にかざして持っていたので、私はいつも素早くどこかの家の扉の中に入っていました。というのも、もし、そこに立ち止まり、彼らにたいして、感じを良くしなければ、その中の数人が隊列から飛び出してきて、さんざんに殴りつけるからです。彼らがそうなったのも理解できますよ。もし、私の両親の家がなく、本当に食べる物がなかったら、と想像してみなくてははいけないでしょう。彼らには、それ以上の着る物などはなかったし、それ以上は望まなかったのです。重要なのは、彼らが、お腹いっぱい食べることができたということです。どうして、人々がナチスに

なったのか、また NSDAP を選んだのかとか、そういった事のすべてについて、原因がきちんと究明されていません。困窮が大きな理由です。困窮が人々に NSDAP を選ばせたのですよ。

〈労働組合〉

1920年代には、ドイツ金属労働者連盟 *Deutscher Metallarbeiterverband* に入っていました。正確には、修業が終わってからですから、1923年から労働組合に入っていました。失業したので、その間は脱退し、再度、加盟しています。修業を終えて、初めて労働組合に入ったのは、アルベルト・ヴィーネッケ *Albert Wienecke* という筋金入りの SPD 黨員を通じてでした。彼も、その後、1933年にデンマークへ逃げなければなりません。しかし、デンマークで肺結核で亡くなりました。彼は、まったく素晴らしい同僚で、私にとっては党でのお手本でした。金属産業労働組合に入ることは、まったく当然のことでした。当時、私は若者で、彼は私のお手本でしたから。彼は、私の職場での同僚で、職場経営協議委員会の委員でした。ブラウンシュヴァイクでは、いつも社民黨員が過半数を占めていたので、彼は、その後、市議会議員になりました。彼は、まだとても若く、25才か26才でした。そんな若さで市議会議員だったのです。とても知的な人間でした。

私が労働組合に入った1920年代、特にインフレ後は、どこの職場でも闘争と連帯が第一で、私たちは組合員でない者を許しませんでした。当時、私はビュッシング社にいましたが、新入りが来ると、私たちは彼らにこう言ったものです。「3週間後に、君の最初の賃金が入ったら、それとも2回目の賃金の後でもよいが、金を持ってきて組合に入るんだ」とね。もし、彼らがそうしなければ、私たちにとって、彼らは存在しないも同然でした。だから、私たちは、彼らに何の情報も与えませんでした。私たちは彼らを心から歓迎し、彼らが私たちと一緒に闘い、完璧な共同体になることを願ったのです。以前は労働組合というものは、盟約を結んだ共同体であったし、すでに長年、実

際に労働組合に特有の連帯感から、私たちは新入りを教育し、強制しなければなりません。組合加入を拒否した人のほとんどは、いつも女性でした。彼女たちにとって、組合費は不必要な出費だったのです。女性は、とくに若い女性は、いつだって靴下や他の必要な物を買いたかったのですからね。1週間分の組合費は、1時間分の賃金に相当したものですから。

そして、その後、1933年が過ぎて、私たちはみな、強制的にドイツ労働者前線 *die deutsche Arbeiterfront* に組み込まれたのです。あつと言う間に、みなが、いち時に組み込まれたのです。これに入らなければならなかったからです。しかし、その前は自由意志による加入だったので、入る必要はなかったのです。

私も、不可避的にナチスの労働者前線に入れられました。

SPDには、戦後すぐの1946年に入党しました。25年の永年党員表彰状をもらいました。戦前、私は、スポーツ、とくにサッカーに熱狂していたので、政治的なことに関心が向かず、戦後になって成熟してからのようには、政治的な活動はしませんでした。つまり、1945年の後、私は自分に、もうあんな事は起こってはならないのだ、と言い聞かせたのです。

私は、戦後、ビュッシング社の板金部でマイスターになりました。だから、私のもとで働きたい者は、労働組合に加入しなければなりません。板金部は、工場全体で唯一、*IG Metall*（金属産業労働組合）への加入で、100パーセントの組織率でした。

<帰属意識>

私の両親は9人も子供がいましたが、兄の何人かは、実際にいくらか高い教育を受けていましたし、当時の私の家族が精神的に属していた階層は、中流の階層でした。車に乗ることや性交すること以外には何も頭はないというような、今日の労働者階層という意味では、労働者階層には属していなかつ

たということです。当時の労働者階層は、今のそれのように、ひどくはありませんでした。男と女の関係では、今ほどに、あっちへ行ったり、こっちへ行ったりということはなく、もっとひかえめでした。

〈組織の役員〉

私は、ある時期に、ビュッシンク社の職場経営協議委員会の委員だったことはあります。

また、私は、第二次世界大戦後、IG-Metallの地区委員長もしました。スポーツをやめてからは、政治的に活発になりました。政治活動なしには、何も始まらないということを知ったからです。しかし、これは第二次世界大戦後になってからのことです。

13. 祝い事・余暇

〈祝い事〉

私の両親の家では、みなはまだ健康で元気だった頃は、いつも両親のもとに家族みんなが集まりました。

5月1日のメーデーには、私たちはいつも、労働者と一緒にパーヴェルシェン・ホルツまで「シン・デラッサ・ブンデラッサ」‘*Schin derassa, bumderassa*’とかけ声をかけながら、行進しました。とても楽しかったし、すばらしかったものです。

復活祭には、シュレーバーガルテンにいました。そこで、私は、ゆで卵に色を塗り、父がそれをかくして、私たちは、ゆで卵探しをしました。

大晦日は、何の行事もありませんでした。

子供の頃、クリスマスのお祝いはしませんでした。経済状態が、悪かったのです。経済状態は、だんだん悪くなりました。忍び足で近づいてきて、インフレーションが始まりました。第一次大戦後、1919年から始まり、1923年～24年頃まで続きました。そして、やっと金マルク（：第一次大戦後のイン

フレーション時代に用いられた、1914年以前の金平価に相応する計算単位)がやってきたのです。

〈余暇〉

1920年代、大人になってからの余暇の楽しみは、スポーツでした。すでに話したように、私は、熱狂的なスポーツマンでした。私は、スポーツ・スタジアムに立って、見ているのではなく、自分自身がスポーツをしたのです。

父の唯一の余暇の楽しみは、シュレーバーガルテンでした。彼は、随分長い時間、シュレーバーガルテンで過ごしたものです。それに、勿論、彼の木工労働者連盟でも活動していました。集会がある時は、彼はいつも活発に発言していました。

母は、彼女の9人の子供たちを大きく育てるのに闘い疲れていました。余暇を楽しむ時間などなかったのです。彼女は、ちょっとすわって1杯のコーヒーを飲むことができるだけでも、嬉しいくらいでした。それが母の余暇でした。それに、本を読むのが好きでしたし、色々なことを知っていました。

両親は、例えば、ハインリックスハーフェン *Heinrichshafen* へとか、しばしば近郊への遠足に連れていってくれました。蒸気船で行けたのですが、当時は、ブラウンシュヴァイクの会社の蒸気船は、まだありませんでした。「ブルンスヴィック」*Brunswigg*だか「ブルンスヴィガ」*Brunswiga*とかいう名前だったと思いますが、古い駅の、中央駅からハインリックスハーフェンまでオーカー川 *Oker* に沿って船で行けました。途中で降りることができました。ビュルガーパーク（：市民公園）*Bürgerpark* には、とても素晴らしいレストランがありました。そのほかにも、私たちは、パーヴェルシェン・ホルツに行ったり、クヴェルマーの森にも行きました。クヴェルマーの森には、いたるところに飲食店があり、私の家族は、その恩恵にあずかりました。もちろん、まだ家にいる子供たちは、みな一緒にこの遠足に出かけましたが、最後の頃は、いつも、多くても、2人か3人でした。もう前に話しましたが、第一次世界大戦後は、みんながツェラー通りの家に避難してきていたのです。

1930年に、再度、失業しましたが、この頃、私は熱狂的にサッカーをしていました。サッカー仲間たちとの友情がありました。それに、当時、私たちは、自分たちのための運動場をつくらねばなりませんでした。ツェラー通りにつくったのです。この運動場は、1年半前に壊されて、ビーバーヴェーク *Biberweg* に移されました。私は、17才で、友人たちと一緒に、ブラウンシュヴァイク・スポーツ協会 *Braunschweiger Sportverein* を1922年に創設したのです。この協会は、労働者スポーツ・クラブ *Arbeitersportclub* ではありませんでしたが、私たちはみんな労働者の子供でした。

私は、1933年までブラウンシュヴァイク・スポーツ協会「アイントラッハト」 *Braunschweiger Sportverein 'Eintracht'* の会員でした。私たちは、これをBSV 22と呼んでいました。この協会は1922年に創設されたのですが、私もこの協会の創設者です。私は三種競技で優勝もしました。兄だけではなく、私もスポーツマンだったのですが、兄のワルターが、私のお手本でした。私は、走り幅跳びと100 m距離などの陸上競技が得意でした。夏の間、サッカーシーズンでない時は、私たちは陸上競技をしました。1926年には、ブラウンシュヴァイクで一番の跳躍競技選手でした。その時のメダルをまだ持っています。ブラウンシュヴァイク・スポーツ協会「アイントラッハト」の主催で、全北ドイツのエリート選手が招待され、競技会が催されたものです。ハンブルクからもベルリンからも選手が来ました。私は走り幅跳びで1番になったのです。私は、チーム・リーダーでした。ずっとリーダーをしていました。

1922年、とても短い期間でしたが、国民スポーツ協会 *Verein für Volkssport* に入っていたことがあります。インフレのあった時期です。私は、本当に労働者の代表でしたが、あの協会の環境は気に入りませんでした。その環境たるや、あまりに乱暴でひどかったのです。小市民のいやらしさですよ。このドイツの小市民の俗物根性は、今もなくなっています。この俗物根性つてものを私の修業時代の親方のもとで知りました。修行中、私は色々な層の家に行って、修理をしましたが、私が修業していた当時は、非常時でした。

だから、ストーブの火を細く焚いていたのです。私の親方は、その時代ですから、ストーブや、褐炭コークスなど何でもつくっていました。それに、ストーブの炎を小さく調整することも仕事にしていました。それで燃料が節約できたのです。お客の数は、とても多くて、私たちは、休む間もなく、炎を小さく調整するために、お客の家々を回らなければならなかったのです。その当時のストーブは大きかったのですが、炎を小さくするのに、中に粘土質の耐火煉瓦を入れたものです。私たちは、機械の修理工なのに、どんな仕事でも引き受けました。そして、私たちがほんのちょっとでも行儀悪くしたら、そういった客は、すぐに私たちを家から追い返したものです。本当の庶民はちがいました。庶民は、高くつくので、修理に来させるなんてことはできませんでした。こんなことをさせたのは、小市民だけです。いずれにしろ、私はこういった人々に対して、どんな風に振るまわなければいけないのかを知りました。そうしなければ、客を獲得できませんから。まあ、そういう振るまいをしなければ、彼らは私たちを汚い物でもあるかのように扱いましたからねえ。そういった人々のいる協会をやめたのです。私にとって、本当に低級な協会だったのです。

私は、いつも実際にスポーツをする方に関心があったので、会計係などの役員の職は拒否していました。例えば、私が現役だった頃は、どの協会も毎年、陸上競技会を催しました。そして、いちばん優秀な者を選んだのですが、私が現役を引いてからは、まだ1年間は競技会をしたけれども、その後はやめてしまいました。私は、協会の仲間にとってお手本だったのです。何年もたってから、協会の仲間、ここの庭園協会で会いました。そうしたら、彼は、息子に「このひとは、私のお手本だったんだ」と言っていました。ここの庭園協会には、年金生活に入ってから入りました。年金生活に入る前は、時間がありませんでしたからね。